

やつぱり毛布を俺は持つてゐたので、其の毛布を頭からかぶつて了つた。完全に人間だか荷物だか見分けがつかない。

「アグラをかいたまゝ動かないのだ。」

「十分三十分と時間が立つ。」

「評子を鳴らしても幕をあける事が出来ない。樂屋でも騒ぎ出した。」

「刑事と出方とが相談してゐる。」

「凝然してゐる俺の頭へ、態と子供を打つ突からして母親が通る。」

「可愛そうにもう一時間にもなるわ、毒藥でも飲んで死んだんぢやないか知ら」

「娘の私語も俺の耳には這入る。」

「觀衆もあまりに幕の引きようが遅いので初めは、」

「何か役者に恨みのある人かも知れやしまへん、よつほど芝居好きだんな」とか囁いてゐたが、

「巡査を呼べ」とかドナル奴も出て來た。

「俺は立ち上つた。觀衆に向つて大聲で叫んだ。」